

## あとがき ―余技性からみた書文化の行方―

鍋や包丁、住宅から大学の新設学部の名称まで、「文化」の語は、日常のそこかしこに見受けられる。最近公表された新しい学習指導要領も、国語科書写、芸術科書道ともに、書の文化の重視を謳っているようである。こうした「文化」の汎用に鑑みる時、本書が安易にそれに乗じているかの印象を与えかねないのは、いかんともし難い。

そもそも文化とは、どこか得体の知れない代物である。この語の汎用も、その漠然とした捉えどころのなさと同様に表裏であろう。固定化された既存の「ハイカルチャー」だけが文化ではない。昨今の新興「サブカルチャー」の浮沈や変幻自在ぶりは、文化が常に可変的・流動的な存在で、さらにその根底に混沌とした未定型の知が湧きかえっていることを予測させる。しかも、時代の波に乗る新しい文化は、旧来のハイカルチャーのあり方にも、刻々と影響を与える。本書でみてきたとおりである。

もつとも、書は歴史的に確固とした地位を占めた一領域ではあったが、旧来その存在は、しばしば「小道」とか「余技」と称され、むしろサブカルチャーの色合いが強かった。旧来、書の中心的な担い手は、いわゆる「文人」であり、彼らは経書や史書に通じ、詩文に堪能で、何よりも優れた為政者たるべく官途を志した。文人官僚における余技としての書のあり方は、中村伸夫氏の『中国近代の書人たち』（二女社二〇〇〇年）「序にかえて」に詳しく論じられている。彼ら文人の優れた筆跡は、自身の豊穡な教養の余滴であり、書はその余技性によって、広汎な文人教養の象徴として機能した。

さて、欧化と並行して王朝官僚制が瓦解した近代、書は「純中国的な文化現象の孤星」（中村氏）となり、そ

の命脈の保持は、以前の文人官僚とは異なる新しい知識人に委ねられてゆく。本書に登場した主人公をみると、道光期の恵兆壬は暮年まで官に就いていたようであり、羅振玉は辛亥革命以後も満州国に仕えるなどしたが、羅より約十歳下の顧燮光は革命を期に官途を放棄、羅と同世代の呉隱は当初から鬻芸いよくげいに専念し、顧とほぼ同年の狄葆賢てきぼうけんも、宮仕えとは無縁に事業を展開した。この例一つをとっても、文化の担い手の推移は如実に辿ることができる。しかし、おのおのの立場は異なっても、彼らに旧来の文人型の教養が一貫して備わっていたことは改めて説くまでもなかるう。彼らにとつては、書が背後に潜む総合的な文人教養と不可分の存在であることは、理の当然であつたに違いない。

ただ、新たな書文化の波に乗じた書は、次第にその余技性を失っていった感がある。本書でみたような専門的な社団の組織や、高等教育における教科化、メディア上のコンテンツ化が進むにつれ、書は筆墨の技芸に特化され、基盤としての総合的な文人教養は、後景に退くように映る。もとより、そこには意識的に余技性を相対化し、脱サブカルチャーを旗幟として、書の純芸術性を追究する動きもあつたろう。それは、正当に評価されなければならぬ。そうした内在的な動きの一方で、新文化の側にも、書のみならず諸々の文人教養の分化・純化を促す側面があつたことも確かである。

杉村邦彦氏は、画に「文人画」のジャンルがあるにもかかわらず、これに相当する「文人書」の語が書に備わらないことを例に、文人と書の緊密な結び付きの自明を説きつつ、「文化のあらゆるジャンルにわたつて専門化、分業化、細分化が深まりつつある現代、博学多芸を理想としたかつての「文人」のような存在は影をひそめ、不可能に近くなつている」と指摘されている（『中国書法史を学ぶ人のために』「序論」世界思想社二〇〇二年）。こうした現下、徒いとに文人回帰という短絡的な保守論を弄しても、来るべき新書文化の到来に対し、何ら展望は拓ひらけないのかもしれない。

しかしながら、新文化の担い手が実は旧来の伝統の継承者であつたという、本書の事例の数々は、「はしがき」

に述べた伝統と革新の共存や、グローカリズムの問題と相まって、やはり示唆的であると思われる。これに関連して、最後に、松村茂樹氏が論ずる近代芸苑の巨匠・呉昌碩とその弟子・趙子雲の關係について（『近代中国の文化人と書』「趙子雲」研文出版二〇〇〇年）少しく紹介し、本書の欠を補いたい。氏によれば、呉は「詩書画印四絶の文人氣質を持」ち、それを齷くさいだ專業芸術家であり、「その画に自らの詩情を盛り込むことを重視」し、「画のオリジナリティを尊重」したという。これに対し、呉の代作に励んだ趙は「オリジナリティよりも師風追随の方が大切」であり、そこに「偉大なる師の弟子であるという誇り」を抱いていたとされる。

以上の例は、本書では扱わなかった作家・表現者に焦点を当てたものだが、急速な市場経済の発展を背景とした鬻芸は、やはり新文化の一つと言ってよく、そして皮肉なことに、文人書画家の形骸を追う代作・贋作の横行も、書画市場文化から派生したサブカルチャーといえる。こうした形骸追随のサブカルチャーが、種々の書文化にわたり席捲しかねないとすれば、事は見過ごせない。本書の主人公たちは、伝統的教養を基盤に、却ってオリジナリティー溢れる新書文化を創出した。彼らの伝統とは、狭隘な書芸術に限定されない、広汎な知の体系である。それらの自由な絡み合いが、清新なオリジナリティーを自ずと醸成していったといえよう。向後の書文化に対する、本書のささやかなメッセージである。

さて、以下に各章の初出を記しておく（「」内は本書対応章）。

- ・「呉隱の西冷印社創立前夜―法帖制作を介した交流―」（『新書鑑』三三三八―三四三三号 新書鑑編集部二〇〇三―〇四年）「第一章」
- ・「初期西冷印社と近代美術社団」（『中国近現代文化研究』六号 中国近現代文化研究会二〇〇三年）「第一章」
- ・『清稗類鈔』鑑賞類・法書関連条の典拠について―有正書局印行物との比較対照を中心に―（『言文』四九号 福島大学国語学国文学会二〇〇二年）「第二章」
- ・「有正書局の法書出版について」（『中国近現代文化研究』五号 中国近現代文化研究会二〇〇二年）「第二章」

- ・「法書出版研究序説」（『言文』五〇号 福島大学国語学国文学会二〇〇三年）「第二章」
- ・「顧燮光「書法源流論」浅説—上海美専における幻の金石書学講義録—」（『言文』四八号 福島大学国語学国文学会二〇〇一年）「第三章」
- ・「羅振玉が顧燮光に与えた尺牘」（『書論』三三二号 書論編集室二〇〇一年）「第三・四章」
- ・「恵兆壬『集帖目』考—中国国家図書館蔵本を中心に—」（『書法漢学研究』三号 書法漢学研究會二〇〇八年）「第五章」

・「清末における尺牘集の刊行」（『書論』三八号 書論編集室二〇〇八年）「終章」

このうち「恵兆壬『集帖目』考」は、平成一九年度科学研究費補助金（基盤研究（C））「中国近代書論の文献学的研究」（課題番号一九五二〇二八九）による研究成果の一部である。

本書は、恩師・中村伸夫先生の上掲書、そして先輩であり中国近現代文化研究会同人の松村茂樹氏の上掲書の後塵を拝し、「近代中国の書」を論じた第三弾を意識したものであったが、内容が伴わないことに忸怩たる思いがある。両氏をはじめ、これまでお導きいただいた方々に心から感謝申し上げますとともに、それに応じ得ない非力を深く愧<sup>は</sup>じる。

なお、本書は筑波大学出版会、丸善プラネット株式会社のご高配により上梓に至った。装幀には、田中佐代子氏のご助力を賜った。関係の各位にも、この場を借りて改めて御礼申し上げます。

二〇〇九年初秋

菅野 智明 識